

高田の城と城下町施設の配置形態に関する考察

油 浅 耕 三*

(平成13年10月31日 受理)

A Study on Institution Arrangement Form of Castle and Castle Town in Takada

Kouzou YUASA*

This paper, from the side of the maps of castle and castle town, deals with the institution of castle and castle town in Takada. The Takada was castle and castle town which has from 58,000 to 750,000 "Koku" (180 liter) of rice in Edo-era in Japan. On the whole, the site of institution selected from the side of the use and scale of building. As the results of this study, the striking point are as follows: (1) In case the Takada, as the first constructed institution can think the "Sakuji-sho" (building house), the "Enshou-kura" (gunpowder store house), and the "Baba" (riding ground) etc. (2) At the same time, as the after constructed institution is the "Toki-no-kane" (hour telling bell), the "Machi-kaisyo (administrative institution of tradesmen and artisans) and "Han-kou"(school) etc. (3) In the after big earthquake, "Tera-yashiki" (buddist temple's lot) changed.

Keywords : Takada, institution arrangement form, castle, castle town, map of castle and castle town

1. 緒 言

いうまでもなく、近世の城下町は、その建設と展開を通して様々な施設をつくりだしてきている。従来、城や城下町の施設に対する研究は、その施設の建築そのものが散発的に取り上げられ、報告書や復元という形で扱われてきている状況にあるといえる。

しかしながら、城や城下町について、1つの領域の中で、いかように個々の施設が規模や配置の面で考えられ位置付けられてきたかの研究は、遅れている現状にあるといえる。

本研究は、こうした現状を踏まえ、個々の城と城下町ごとに、施設のあり方がどのように展開していったかを考察しようとするものであり、本稿では越後の高田を取り上げた。

2. 研究の方法

*建築学科 教授

城や城下町の絵図はそれぞれ作成目的があり表現内容がまちまちである。絵図にみられる個々の施設は、当時の城や城下町での位置関係を伝えているところに特色をもつ。同時にまた、施設の屋敷の規模や形状、あるいは向きや周辺環境を伝えている点でも重要な意味をもつといえる。

以下のような方法によって城と城下町の施設を考察する。

- 1) 高田の城と城下町絵図を全国的に収集する。
- 2) 収集した絵図を城と城下町に分けて編年的に整理分類する。
- 3) 各絵図に描かれた施設内容を総合し、かつ藩政時代の史料とも対応させつつ堤・橋・船蔵・御殿・蔵・馬場・高札・番所などについてその特質をみる。

3. 城絵図と城下町絵図

いうまでもなく高田城は、慶長19年(1614)、75万石の城として松平忠輝(徳川家康六男)により築かれた。いわゆる天下普請として多くの大名が築城に係わっており、

Table 1 The maps of Takada castle and castle town

	名称	年代	所蔵	大きさ(cm)	備考	
城	①『高田城内絵図』	寛文7年(1624)～ 天和元年(1681)	上越市立図書館	185.0×180.0	彩色	
	②『越後高田城絵図』	寛文7年(1624)～ 天和元年(1681)	国立公文書館	182.5×170.5	彩色	
図	③『越後高田城絵図』	嘉永元年(1848)	静嘉堂文庫		彩色	
城	④『越後国高田城絵図』	正保頃(1645頃)	上越市立図書館	248.5×202.5	彩色	
	⑤『越後高田』	寛文7年(1624)～ 天和元年(1681)	広島市立中央図書館	『諸国当城之図』	彩色	
	⑥『(高田城下町絵図)』	寛文7年(1624)～ 天和元年(1681)	渡辺敬一氏	273.0×363.0	彩色	
	⑦『(高田城下町絵図)』	寛文7年(1624)～ 天和元年(1681)	上越市立図書館	300.0×280.0	彩色	
	⑧『(高田城下町絵図)』	寛文7年(1624)～ 天和元年(1681)	上越市立図書館	135.0×157.0	彩色	
	⑨『(高田城下町絵図)』	寛文7年(1624)～ 天和元年(1681)	上越市立図書館	135.0×161.0	彩色	
	⑩『(高田城下町絵図)』	寛文7年(1624)～ 天和元年(1681)	上越市立図書館	139.5×135.5	彩色	
	下	⑪『(高田城下町絵図)』	寛文7年(1624)～ 天和元年(1681)	上越市立図書館	228.5×160.5	彩色。貞享元年写
		⑫『(高田城下町絵図)』	寛文7年(1624)～ 天和元年(1681)	上越市立図書館	154.0×136.5	彩色
		⑬『(高田城下町絵図)』	寛文7年(1624)～ 天和元年(1681)	上越市立図書館	154.0×142.0	彩色
		⑭『(高田城下町絵図)』	寛文7年(1624)～ 天和元年(1681)	静嘉堂文庫		彩色
		⑮『(高田城下町絵図)』	宝暦6年(1709)	上越市立図書館	212.5×114.5	彩色
		⑯『(高田城下町絵図)』	元文2年(1737)	上越市立図書館	174.5×169.5	彩色
		⑰『(高田城絵図)』	寛保元年(1741)	上越市立図書館	157.0×148.0	彩色
	図	⑱『(高田城下町絵図)』	寛保元年(1741)～ 慶応4年(1868)	植木 實 家	153.0×132.0	彩色
		⑲『高田町絵図』	年代不詳	上越市立図書館	220.0×100.0	彩色

高田は、徳川の城と城下町としての位置付けを認識しなければならない。

その後、忠輝が改易となり、元和5年(1619)に松平忠昌が入り(25万石)、寛永元年(1624)には松平光長が入城(26万石)する。

次いで貞享2年(1685)稲葉正通(10万3000石)、元禄14年(1701)戸田忠真(5万8000石)、宝永7年(1710)松平定重(11万3000石)と続き、寛保元年(1741)榊原政永(15万石)が入城。子孫相継いで明治に至っている。

このように高田は、大名の入れ替えが際立っているところに特色をもつ。

こうした大名の入れ替え状況と、今日に伝えられている絵図とが係わりをもっていると思われるであろう。管見する高田の絵図を整理したのが「Table 1」で、松平光長時代の絵図が多い。

城絵図は3枚であるが、特に①・②は、城内の状況を建物と共によく伝えており貴重である。

④～⑭までが光長時代のもので、④は幕命により調製された城絵図である。

⑤～⑭について年代を考定できた根拠は、寛文5年(1665)後に寺町の屋敷部分が大きく変化する¹⁾ことと、光長の改易による²⁾。

⑥～⑬は、城下町の侍屋敷・寺屋敷・神社屋敷などに、屋敷の寸法、侍名、寺院名・神社名を記し、絵図には侍の役職・石高、寺院の宗派を書き記しているものもみられる。

また⑮～⑱は、光長時代とその後の城下町の変化を藩の石高との関係でみることができ、併せて貴重である。

4. 施設の種類と配置形態

城については②(「Fig.1」)に、城下町については最古の絵図である④(「Fig.2」)に、各絵図にみられる施設内容の位置を示す形で考察を進めてゆきたい。

また、土木施設から建築施設へ、城から城下町施設の順に、各施設の状況を以下のようにみてゆくこととする。

★堤

関川と今泉川の交差する部分の西側には、⑦に「ヤナキツツミトテ」とある部分がみられる。この地域は、しばしば川が氾濫してのこととみられ、低湿な地形にあった状況をうかがうことができる。

★土井

④に「土井」の書込みが目立つように、高田は、外堀内を石垣でなく土井で囲む縄張りをとっている。これらの点は、高田城の周辺を関川や今泉川などが取り囲むという地形的状況を踏まえてのことと考えられる。

★橋

④で27の橋が確認できる。ほとんどが木橋で、このうち土橋は7で6が外堀内にある。⑱では、時代の変化による架設として木橋1、土橋1が城下町の部分で確認できるが、これらの橋は、橋の間隔に関わる生活の利便性を考えてのこととみることができる。

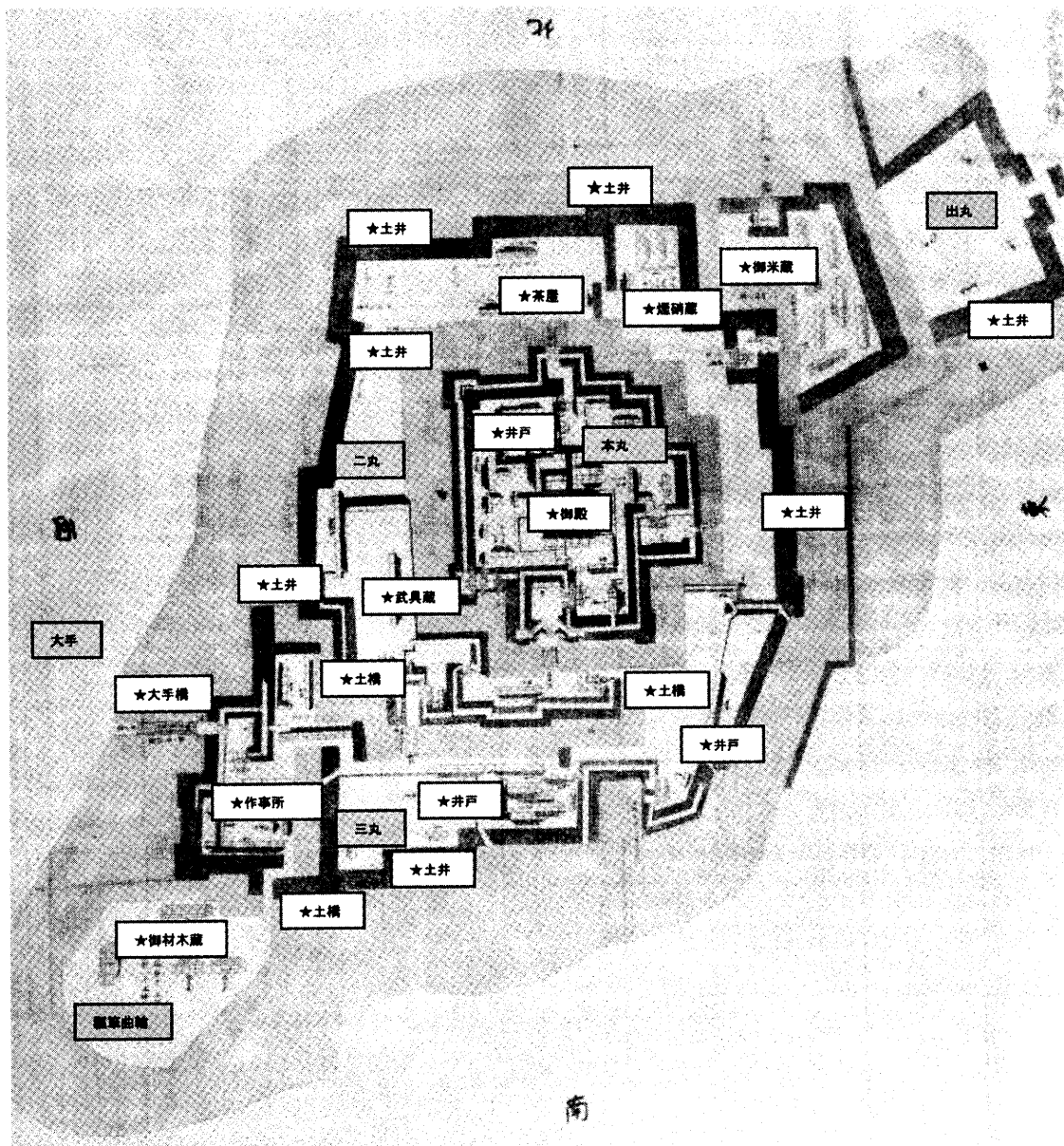


Fig 1 The institution arrangement forms of Takada castle (map: Table 1-②)

★船蔵

いくつかの絵図で確認できる。⑱でも同様の位置にあり、直江津の港へと繋がる関川の城下町側の部分は、藩政時代当初より荷揚地として考えられていたとみることができる。

★御殿

②・③で本丸御殿がみられる。建物の数と配置の形状から徳川の城として造られた駿府や名古屋城の本丸御殿の状況と類似した関係をうかがうことができる。

★茶屋

②にみられる。二丸にあり、脇には「樹木畑」の書込みがある。城内での生活面を考えてのことで、城の建設当初より計画されたとみられる。

★御城米蔵

①・②で確認できる。高田の場合、二丸と出丸の間に堀で囲まれた形をとっている。城内での生活に対応するためのもので、他の城でも古い時代の絵図でよくみられる。建設当初よりの計画と考えられる。

★作事所

材木蔵と城とを繋ぐ位置にあり、材木蔵と一体のものとしての縄張りと考えられる。戦時を含めた作事が城内には、求められていたとみるべきであろう。

★材木蔵

瓢箪曲輪全体が材木蔵として①・②にみられる。4棟が描かれているが、材木蔵と木の出し入れを含めた材木置き場の側面も持ち広いスペースを持つ。城郭の端で、かつ堀に直結した位置にあり、水運による木材の運搬と城内での工事を考えてのこととみられる。なお、⑤以降の絵図に「材木置場」が、川と堀を繋ぐ出丸の堀外にみられる。

★井戸

④では、城内に12ヶ所の井戸を表現しているが、寛保元年(1741)の⑱では、「拾九ヶ所」と記述している。平城であり、かつ高田の地形的な位置は、井戸を設けやすい状況にあつたと考えられる。19箇所は、いずれも城内である。

★馬場

三丸の堀外(南側)に「馬場百間」、城下町北部の端に「追廻馬場百三十壱間」の書込みが②・⑥・⑦・⑪などにみられる。また、馬場が二ヶ所の場合、他の城でもこのような配置形態をみることができる。

★御対面所

⑥以降の絵図で「御対面所」が、中堀の外側(西側)にみられる。本道から大手道へと至る城に近い規模の大きな屋敷部分は、藩の公的な施設が置かれる所としての性格をもつといえる。

★藩校

慶応2年(1866)に設置されたが³⁾、明治初期の絵図で「修道館」の書込みがみられる。大手橋に近いかつての重臣屋敷で約2000坪をもつ。

★札の辻

規模の点から④には書込みはないが、城下町建設当初より設けられていたと考えられる施設で、⑱で確認できる。大手道と本道が交差する侍屋敷と町屋敷とが接する部分に置かれることが多く、高田も類似の位置といえる。

★町会所

延享元年(1744)の設置⁴⁾と伝えるが、高田城下町や町屋敷全体の中心部分としての位置を考えてのこととみられる。

★牢

藩主稲葉正通時代よりみられるといい⁵⁾⑱・⑲で確認できる。町屋敷の裏にあつて、路地が折れ曲がった先にあり、外堀に繋がる古川に面している。目立たない屋敷で、しかも、古川で仕切られ、隔絶したところが選ばれたとみることができる。加えて、城に比較的近

い位置であることも注目しておくべきであろう。大垣での牢屋と同様の位置といえる⁶⁾。

★土取場

⑥・⑦・⑪などで「土取場」がみられる。鳥取城下町では、中堀の部分と山の部分に見られた⁷⁾が、高田では、川が交差する部分で、鳥取での中堀部分と同様、軟質な土として考えられる。

★下屋敷

⑤以降の絵図にみられる。特に城下町の北西部や西部・東部に目立つが、城下町建設当初より後の時代に至って次第に増加したとみられることが絵図よりうかがえる。藩主や家老などに係わるものがほとんどといえる。

★御蔵番

⑪にみられる。「御米蔵」の番のための施設で、規模の小さな屋敷ではあるが、城下町の周辺からやや離れた位置の御米蔵である点にも留意すべきである。

★番所

城内では、武具蔵・煙硝蔵・御城米蔵など、ほとんどの一郭ごとに番所がみられるが、城下町では限られた部分におかれている。城下町では、特に東北部の関川にかかる橋の城下町側に、道路を挟んで北側（間口十間）と南側（間口六間）にみられる。

★鉄砲場

⑥・⑦・⑪など、屋敷割の見られる絵図で確認できる。侍屋敷の端の部分には、「七間半×廿間」の書込みがみられるように、敷地の規模は小さいといえる。主に城下町の東北部周辺にみられる。また、絵図によっては、同じ屋敷部分に「鉄砲所」と書込んでいる絵図もみられる。

★矢場

「鉄砲場」と同様の絵図にみられる。城下町西北部の周辺に矢場が目立つ。また、屋敷が細長く表現されており、屋敷としての特徴がうかがえる。

★神社屋敷

寺屋敷と異なり、神社は、城下町の各所に分散する形で位置し数も限られる。屋敷割が、全体として小さいのも神社の特質であるといえる。

★寺屋敷

藩政時代50前後の寺院が存在したことが、城下町絵図より確認できる。この高田の場合、寺屋敷は、まとまった形で寺町の形をとっていた。禅宗・浄土真宗が多く、浄土宗・法華宗・真言宗・時宗がこれに次いでいる。寺屋敷は、藩政時代、大火後に屋敷替えをするケースがしばしばあるといえるが、高田では、寛文5年の地震後に、それまで町屋敷と接していた寺屋敷の部分を既存の寺屋敷（西側）の端に移転し、町屋敷に接する部分には、侍屋敷を新たに設けた。

なお、寛文6年（1666）11月、高田では初めて「時の鐘」が、呉服町に設けられたと伝える⁸⁾。城下町全体からみるとほぼ中央部にあたる点と、「札の辻」に近く、高田における「公」の場としての立地性を考えてのこととみられる。

5. 結 言

全体としては、煙硝蔵や材木蔵が城内に近い堀に面する部分におかれ、馬場が、中堀に面する部分と城下町周辺部に設けられていること。さらに、対面所や会所が大手橋の城寄りにおかれ、鉄砲場・矢場・下屋敷などが城下町の周辺部におかれているなど、各施設それぞれがもつ性格や使う頻度などが考慮されていることが絵図の表現内容よりうかがえる。

高田の場合、以下の点をあげておきたい。

1) 城と城下町の建設当初の施設として、煙硝蔵・作事所・材木蔵・馬場・札の辻などが考えられる。2) 建設後の施設として、時の鐘・町会所・藩校などが出現するが、各施設の使われ方や規模の面で、敷地選定が進められていった点が考えられる。3) 施設の移転の面では、大地震が契機となっている。

文 献

- 1) 高田市史編集委員会編：『高田市史・第1巻』，高田市役所，1958，p. 83.
- 2) 高田市史編集委員会編：『高田市史・第1巻』，高田市役所，1958，年表p. 4.
- 3) 高田市史編集委員会編：『高田市史・第1巻』，高田市役所，1958，年表p. 10.
- 4) 高田市史編集委員会編：『高田市史・第1巻』，高田市役所，1958，年表p. 6.
- 5) 高田市史編集委員会編：『高田市史・第1巻』，高田市役所，1958，p. 77.
- 6) 油浅耕三：大垣の城と城下町施設の配置形態に関する考察，地域施設計画研究，17，日本建築学会，1999，p. 116.
- 7) 油浅耕三：古絵図による鳥取城下町の自然環境に関する一考察，都市計画別冊，24，日本都市計画学会，1989，pp. 615～616.
- 8) 高田市史編集委員会編：『高田市史・第1巻』，高田市役所，1958，p. 123.